

とどけよう つなげよう ふれあおう

お手玉で 輪・和・笑（ワ・ワ・ワ）

鈴木 幸子

『そう上手、よくがんばったわね。すごいね！』部屋のあちこちで子供の歓声と、それを褒め称える声が響き渡る。『私も出来たよ。ほら見て、見て！』初めて触ったお手玉が宙を舞うのが嬉しくて、待ちきれない児童が寄ってくる。子ども達も、中高齢者も、楽しげにお手玉遊びをしている。

『もうそろそろ自分の楽しみを見つけたらどうだ』と一足早く地域デビューをした夫は言った。その頃、私たち夫婦は、暇を見つけて江戸五街道を歩き、人並みの生活を楽しんでいたが、それは夫婦二人だけの狭い世界での事であった。夫の言う楽しみとは、多くの人との関わりの中での事である。61歳で仕事を辞めたその翌日から、夫は私を街へと連れ

歩いた。私に何かクラブを作らせようとの、密かなたくらみの有ることも知らず、私はそれに乗った。そこで耳にした『お手玉』直感でこれだと思つた。お手玉なら私も出来る。私と同じ年代の人なら一度は手にした事があるお手玉。お手玉で、子どもと中高齢者を結びつけよう。お手玉の資料集めの図書館通いが始まつた。数日後『お手玉で癒す心と体』の本に出合つた。その本に私は釘付けになつた。お手玉遊びは、瞬発力、瞬時の判断能力を高め、集中力を養い、脳を活性化するとあつた。今まで自分が思つていたお手玉の世界とはまったく違つた世界がそこにあつた。毎日のように子供の事件が報道され、ゲームが矢面に立たされていたそんな時である。

後先も考えずボランティア仲間や、姉に声を掛けた。ところが会を運営する資金がない。定例会を持つにしても会場費がない。そんな時在職中から余暇開発士や、レクリエーションコーディネーターの勉強をしていた夫は、私の良き師として『市民活動支援センター』の会場が、無料で借りられる』等、お金を掛けない会の運営を助言してくれた。

夫を含めた7名で、16年4月お手玉の会を結成、定例会を市民活動支援センターで行った。お手玉の懐かしい響きだけで集まった仲間、お手玉作りから始めようと、家から布を持ち寄った。女の集まり、手は動くが口も動く、終始賑やかである。そうこうしているうちにお手玉が出来上がった。

幼い頃遊んだが、どうしたら子どもと中高齢者を結び付けたら良いのだろう。頭に浮かんだのは学童保育所だった。学童保育所に帰る児童たちは、親と触れ合う時間が必然的に少なくなる。触れ合いの良し悪しは時間ではない。密度だ。お手玉遊びをした児童が自宅に帰り、夕飯の支度をしている親に、お手玉遊びの話をする。会話に花が咲き、親子のコミュニケーションに使えないか。と勝手に思い込み勇気を奮って学童保育所に電話をした。『お手玉で遊ばせてください。』

会員手作りのプレゼント用のお手玉を持って、初めての外部活動は、結成4ヵ月目のことである。経験のない私達でも、児童にとって先生であつた。悪戦苦闘の1時間はどうにか過ぎ、姿が見えなくなるまで手を

振って『また来てね』と、児童達は送ってくれた。児童と遊ぶことの重大さと、心地よさを同時に感じ取った。たかがお手玉と侮ってはいけない。もっとお手玉について勉強しなくてはと、本で知った他市のお手玉の会に連絡を取り、研修生として参加させて貰い、同時に全国組織の『日本のお手玉の会』に入会した。『八王子お手玉の会』と命名会則も作成した。

初めての学童保育所でのお手玉遊びが『夢はでっかく、異世代交流』と題して、市民活動支援センター発行の『市民活動通信』11月号に掲載された。記事を見た児童館の先生から、お手玉遊びの要請を受けた。先様から頂いた初めての依頼である。これを機に市内の児童館の先生に、お手玉遊びの素晴らしさを説いて回った。同時に一年にも満たない私達は、中央公民館青少年講座『作って遊ぶ、親子で楽しむお手玉教室』講師の依頼を受けた。会員はまだ十名に満たない状態であったが、力を合わせた講習会に、参加者は『楽しかった、久しぶりにお腹の底から笑った』と絶賛してくれた。自作のお手玉を、大事そうに帽子の中に包み込

んで持って帰る子どもの姿に強く心を打たれた。今世の中、物で氾濫している。お金を出せば何でも手に入る時代になった。そんな今だからこそ、自分の遊ぶ遊具は自分の手で作る楽しさを伝えようとの思いと夢を17年度市民企画事業補助金の申請『Myお手玉で お手玉遊び』に託し応募した。

市民祭りの『いちよう祭り』にも出展し、初めてお手玉が売れることを知った。

無償ボランティアの私たちに、講師料や謝礼が入ってきた。考えてもいなかった事である。これらの報酬は全てお手玉製作の材料費に当て、子供たちに還元した。保育園、学童保育所、児童館をはじめ活動をさせて頂いている所には、会員手作りのお手玉を40個から50個寄贈し、何時でもお手玉遊びが出来るように環境づくりをさせてもらった。

翌年17年は先に出した、市民企画事業支援部門で、補助金交付団体に承認され、10万円の補助金を頂く事になった。市民の大切なお金を使うのだから気の引き締まる思いで、企画書の内容に沿って活動をした。機

会あるごとに子どもたちには、無償で俵型のお手玉を縫ってもらい、お手玉遊びをし、自宅を持ち帰らせ、家庭の中にお手玉を置いて貰った。子ども達がお手玉作りをしている間、辛抱強く待っていてくれる親が増え、親子でお手玉遊びを楽しんでくれるようになった。

市からの補助金は、信用と信頼を得、ネットワークの仲間入りをもたらし、交流会では多くの仲間に出会い、市内小中学校校長会では貴重な時間に、お手玉について話す機会を頂いた。又メディアの目に留まり、児童館でのお手玉遊びが新聞に掲載された。小学校での昔遊びの授業にも呼ばれるようになった。会員募集の広報や、お手玉遊び講習会の参加者から、会の趣旨に賛同し入会してくれる人も増え会員は30名を越えた。

だんだんとお手玉遊びの依頼が増え、お手玉遊びのボランティアを養成するには、中高生にお手玉の作り方と、遊び方を知って貰おうと、18年度市民企画事業補助金の申請書に『中高生にお手玉遊びの普及活動を行う』を盛り込んだ。会員と手分けをし、年度末の2月より中学校、高

等学校を訪問し、授業に取り入れてくれるよう、今までの体験を説いて回ったが、快い返事はもらえなかった。諦めにも似た気持ちのなか18年度支援部門での補助金交付団体に承認された。時間を作っては、勇気を出し学校を訪問した。そんなある日、廊下で女性の教務主任の先生にお会いした。来訪の訳を告げると、『どうぞ』と応接室に通され即採用が決定され、職場体験の授業の時間を頂くことが出来た。この年18年度、中学校2校、高等学校1校で取り上げて頂いた。中学生の感想に『はじめは、なんだ、お手玉か、と置いていたが2日目は縫い方もよく解かり、遊び方にあんなに種類があるとは知らなかった。とても楽しかった』とあった。学習発表会の壇上で、3個のお手玉を披露しながらの職場体験発表の姿を目にし、本当に良かったと胸を撫で下ろした。今も継続し担当させて頂いている。小学校でも継続しての依頼が増え、忙しい中、楽しい毎日が続く。

19年度は、児童館と共催で初めての『八王子お手玉遊び競技大会』を開催した。タイムで競うお手玉遊びはみんなの心を捉え、来場者全員で

大会を作っていた。交流の部では、会場で初めて会った者同士チームを組むなど友情も育まれた。時間で競うお手玉遊びは、短い時間の大切さを再認識した場でもあった。

20年度は伝統文化こども教室にも採用され、正座での挨拶に始まり、挨拶に終わる、お手玉遊び伝承の必要を強く感じている。

お手玉の重さを40gとし、中に入れる材料を数珠玉、小豆、大豆といろいろ使ったが、種々の事情や洗えるメリットから、石油製品のペレットを使用した。講習会参加者のアンケートの『ペレットは環境に良くないから使わないで』をきっかけに、お手玉作りと遊びを通して、環境を考えた生活が出来るように啓発する、3Rを考えたお手玉作りを始めた。その事が、市環境学習室エコ広場を無料で使える事になり、誰でもが自由に参加し縫って、遊べる、『Myお手玉で お手玉遊び』教室を常設する事が出来た。開設当初階下に降りては、ゲームで遊んでいる児童に声を掛け誘った。今では落としては笑い、成功しては笑いのお手玉遊びを楽しみに、毎月来る児童や、親子連れで賑わうようになった。

自主企画事業での講習会参加者の人集めに失敗し、途方にくれた時は、藁をも掴む思いで生涯学習センターの職員に相談、広報活動のノウハウを教えて頂き、予想以上の効果を上げ、逃げずに立ち向かう大切さを知った。

この4月に活動5年目を迎える私達が誇れる事は、家族の協力の元、依頼を頂いた全てをお受けし、無償を貫いた事だろうか。会員の熱意と継続が、お手玉と人の輪を広めた。会員自らがお手玉遊びを楽しみ、生き活きと、縫い方と遊びの指導をし、子ども達に温もりと心を伝えていく。数えきれない多くの方の支援を頂き、子供達に私達は育てられた。

お年寄りには懐かしい昔遊びであり、子ども達には、新しい興味のあ
るお手玉遊びをツールに、会員の努力の結晶の『第2回八王子お手玉遊
び競技大会』はあと10日後に迫っている。40gのお手玉に魅せられた仲
間が一堂に会し、多世代交流の中お手玉遊びを楽しむ。各所で遊んだ児
童のお手玉の上達を見る日も目の前に来た。老若男女、地域、世代を超
え、とどけよう、つなげよう、ふれあおう、お手玉で輪・和・笑・の活

動はまだまだ続く。